

3 稲梓地域の祭礼にみる歴史的風致

(1) はじめに

稲梓^{いなずさ}の地名は古く、天平7年(735)の平城京跡出土木簡に、「賀茂郡稲梓郷稲梓里」とあるのが最初である。稲梓は11の大字からなり、明治22年(1889)の市町村制施行から下田町となる昭和30年(1955)まで稲梓村と呼ばれていた。周囲を山々に囲まれ、田畑の中に点々と民家が存在する、静かで、里山と田畑が織りなす緑のコントラストが美しい地域である。



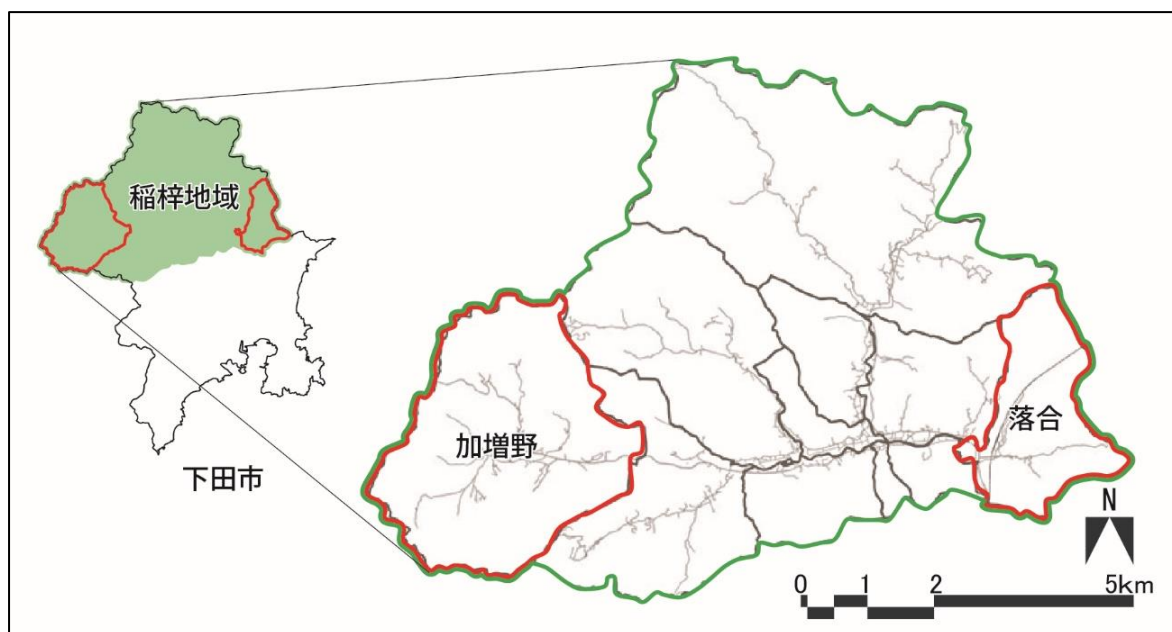
稲梓の山並み

加増野^{かぞうの}にある報本寺^{ほうほんじ}では、毎年8月11日に市指定無形民俗文化財である山随院権現祭^{さんずいいんごんげんさい}幡廻し^{はたまわ}しが執り行われる。祭事は、元禄2年(1689)から始まり、立派な竹を若衆が境内を引き廻すことで、加増野にゆかりのある富永三右衛門^{とみながさん}政重^{えもんまさしげ}の遺徳を偲ぶとともに、厄除けの祈願、さらには五穀豊穡を祈る意味も込められている。

また、落合^{はくさん}にある高根白山神社^{おびしや}では、毎年2月11日に市指定無形民俗文化財である鬼射^{おびしや}が執り行われる。計12本の矢を射ち、その矢が1本でも的を通せば、その年の災厄が退散、五穀豊穡の年になるといわれ、永正17年(1520)に原型が固まったといわれている。稲梓地域では、地域の人々が、独特の祭事を代々継承してきている。

		建物とまちなみ	活動
稲梓地域の祭礼にみる歴史的風致	加増野の山随院権現祭幡廻しにみる歴史的風致⇒(2)	①報本寺と山随権現本社 ②加増野集落	③報本寺の山随院権現祭幡廻し
	落合の鬼射にみる歴史的風致⇒(3)	①高根白山神社 ②落合集落	③高根白山神社の鬼射

稲梓地域の祭礼にみる歴史的風致の体系図



稲梓地域の祭礼が行われる地区

(2) 加増野の山随院権現祭幡廻しにみる歴史的風致

① 建造物

ア 報本寺

『山随権現本開帳記念誌（平成 23 年（2011））』によると、報本寺は、応永 19 年（1412）に婆娑羅山^{ばさらか}の寺平^{てらだいら}から現在地に移り、開山は哲叟友愚^{てつそうゆうぐ}禅師^{ぜんし}で、本尊は聖観世音菩薩^{しょうかんぜおんぼさつ}とある。現在の本堂は、14 世玉州和尚^{ぎょくしゅうおしょう}のとき、宝暦 12 年（1762）から文化 11 年（1814）の間に建立されたと伝えられている。境内環境は、13 世、14 世の 2 代で整えられた。山門下の参道脇には、文久元年（1861）造立の石灯籠がある。境内参道は、山随権現本開帳を記念して平成 22 年（2010）に整備したものである。



報本寺 本堂



報本寺 石灯籠

イ 山随権現本社

山随権現本社は、棟札によると、安永9年（1780）に造営したが、のちに修繕した痕跡がある。鳥居は、天保12年（1841）造立である。本社の横に大小2つの墓がある。大きい墓には「法光院殿嶺雲高徹大居士、神儀、慶長十二年七月十一日」とあり、明治20年（1887）3月に再建されたものである。もう一つの小さい墓には「大雄院和山玄英居士」と記してある。加増野の人は、大きい墓を山随さんの墓とし、小さい墓をその家来の墓と考えている。しかし一方でそれとは逆の、小さい方が山随さんの墓という説もある。



山随権現本社



山随権現本社 社



山随権現本社 墓

ウ 神明神社

神明神社の創建は天文15年（1546）である。鳥居、石塔、庁屋、本殿が建つ。棟札によると、本殿は、昭和30年（1955）に屋根瓦の葺き替えが行われ、一間社流いっけんしゃながれ造づくりである。右の灯籠は、昭和7年（1932）に建立されたものである。本殿のなかには、神明神社の社のほか、日枝神社と6つの小さい社がある。



神明神社

②加増野の集落

加増野は、山々や丘陵に囲まれ、平地が少なく、集落は谷地に形成されている。周囲の農地や背後の斜面緑地とあいまって落ち着いた雰囲気^{よせむね}を醸し出している。農家住宅は、概ね棟方向か平入で、屋根形状は寄棟のものが多^{よせむね}い。この谷地は、加増野ではホラと呼ばれる。



加増野のまちなみ

③活動（山随院権現祭幡廻し（市指定無形民俗文化財））

ア 山随院権現祭幡廻しの歴史

山随院権現祭幡廻しは、加増野の報本寺で行われる祭事である。祭事には、土肥（現在の伊豆市）の豪族富永氏にまつわる伝説が深く関わっている。山随とは富永三右衛門政重^{とみながさん}、もしくは富永山城守^{とみながやましろうのもり}のことであると伝えられている。

一番古くからある説は、以下のとおりである。

富永三右衛門政重（富永山随軒弾正）は、文禄元年（1592）4月11日の前領主富永山城守政家（同族）の命日に、家臣8人を連れて加増野に来て、政家戦死の場所で3回



山随院権現祭（安政9年(1780)）

忌を営んだ。ちょうどその頃、打ち続く戦争に国を失った浪人共が伊豆へ乱入して各地を荒らした。その上、浪人共は疫病を流行らせたので、住民には二重の恐慌であった。浪人の集団は政重のいるところにも現れたので、政重は一撃の下に追い払ったところ、村には寄りつかなくなった。さらに政重は、疫病にかかった人々に持ち歩いていた薬を与えて治してあげたので、村人は重ね重ね感謝した。

その他の由来として、富永氏を弓で誤射して殺してしまったため、以後加増野では弓を使わなくなり、供養のために行っている説や、富永氏が戦いから逃れて加増野に身を隠していたとき、そばで鶏が鳴いたために敵に見つかり、殺されてしまい、以後加増野では鶏を飼わなくなり、供養のために行っている説などがある。

現在も続く形式での祭事は、富永三右衛門政重の遺徳を偲ぶ行事として、元禄2年（1689）から始まったといわれている。加増野区所有の文書『昭和6年（1931）青年団年中行事』には、8月7日山随祭典行燈張、10日山随祭典準備、11日山随祭典^{ほうじょ}幫助、12日山随祭典後片付けの記載があり、少なくとも昭和初期には行われていたことがわかる。

イ 現在の祭事

祭事の際には、報本寺の周辺の主要道路に行燈が取り付けられる。以前は、行燈に和紙を貼り、好きな絵や文字を書いていたが、現在、行燈の絵は、加増野在住の絵本作家鈴木まもる氏が描いていて、様々な絵柄の行燈が報本寺周辺で見ることができる。以前は石の灯籠が8基あり、それに火を灯してオムカエを行っていたが、現在は2基残っているだけで、灯籠の代わりに用いられたのが行燈である。



行燈

祭事の前日には本社へ山随権現をオムカエに行く儀式を行う。報本寺住職による般若経が唱えられ、それが終わると、本社に来た人全員が、竹の筒に入った御神酒をいただき、マクサ（カヤ）の葉に包まれたゴフ（白餅）を食べる。



オムカエの様子

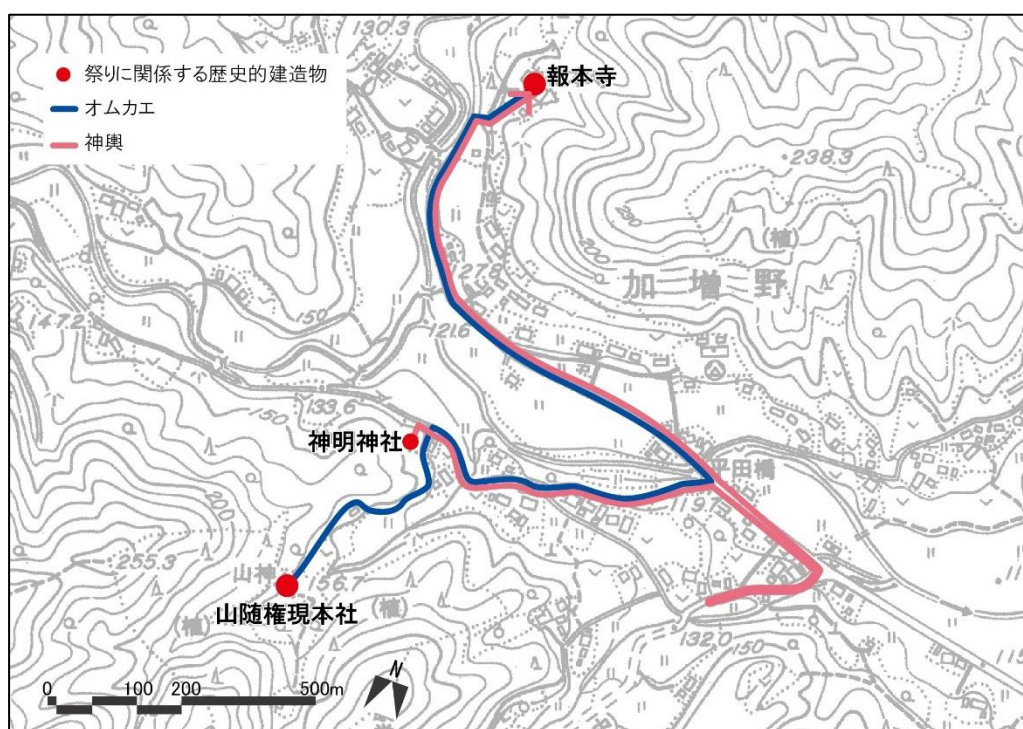


本社内での儀式

祭事当日の昼間は、山随権現と描かれたお神輿を加増野の子供たちが担ぎ、集落を巡行する。



子供神輿



山随権現オムカエと子供神輿巡行のルート

山随院権現祭幡廻しは、祭事当日の夕方から行われる。祭事の前には、報本寺前の川で身を清める。23 節、長さ4間、周囲7寸程の葉ぶりの良い竹を準備し、頂上に山随大権現の旗をつけ、根もとには縄を1尺位の間に巻き付ける。祭事の分担は以下のとおりである。



体を清める役者

禰宜 (ねぎ)	この祭事の総指揮者ともいう役で、幡廻しの際、唱え言をするのでウタアゲともいう。
八人組	祭りの主役で、若い衆の中から選ばれ、虎の縞の着物をつけてこの役を務めるのでトラともいわれる。この8人の中からさらに、背の低い1人を竹の根を持つネモチとして選び、背の高い1人をハタガシラに選ぶ。
アトヒキ	八人組以外の小若い衆（約 15 人）のことで、お揃いの着物に3尺の帯をしめて、トラ達の腰につけた紐を引っ張る。

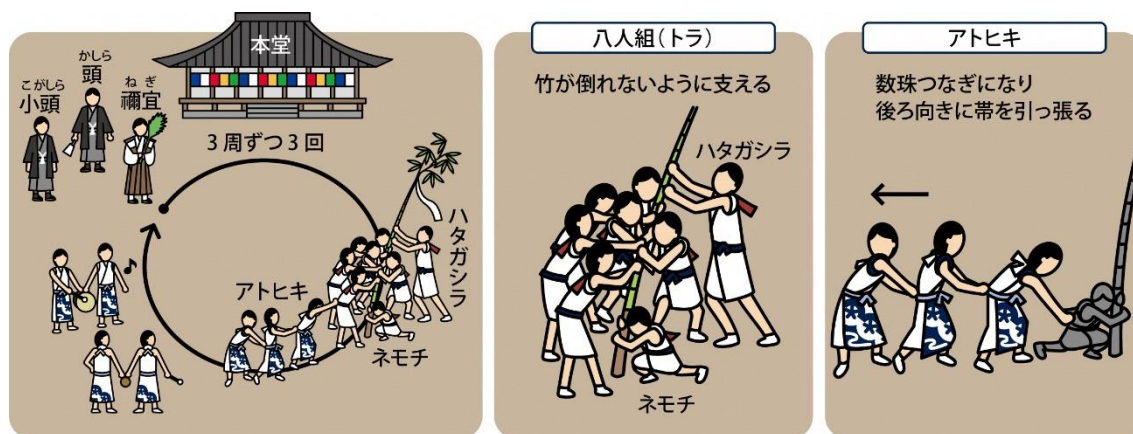
ネモチが竹の根もとに取り付き、他の7人が中腰でその上を支える。アトヒキ達は、八人組の腰につけた紐を引っ張る。この態勢で寺の庭を1回3周づつ、3回9周廻り、1回済む毎に竹を禰宜の前に持っていく。禰宜は笹竹数束を持っていて、竹が前へ来るとその笹竹を3回持ち上げて揺すり、禰宜は「垣根に住むか キリギリス 焼玉の家を力に 申せはやせ 子供（こんども）ら 榎木に住むは玉虫 申せはやせ 子供ら」と呪文を唱え、アトヒキ達はホイホイと掛け声をかける。

八人組は、いずれも不安定な体勢で竹に取り付き廻すため、幡廻しは非常に難航する。その点から来たものか、3回9周無事に竹の先を地につけることなく廻り終えれば、その年は豊作、厄病退散、また1遍でも地につけば凶作、厄病流行という。呪文には、作物から虫を追い払うことを意味しているとも言われている。

八人組やアトヒキは、加増野地区の若衆が中心であるが、元気な年輩者も加わり、一致協力して太くて重い孟宗竹を境内のなかで所狭しと廻す。その力強さは見る者に力を与えてくれる。



山随権現祭幡廻し



山随院権現祭幡廻し

(3) 落合の鬼射にみる歴史的風致

①建造物

ア 高根白山神社（拝殿）

高根白山神社は、棟札によると、応永9年(1402)に建立されたことがわかる。その後、永正16年(1519)に拝殿を建設、文政3年(1820)には再建している。拝殿は、平入り、切妻造である。鳥居は、寛永14年(1637)に建立、明治4年(1871)に再建されている。拝殿の前にある石灯籠には、寛延の文字が刻まれている。



高根白山神社

②落合の集落

山地斜面を背負い、河岸段丘上に家屋が立地して、家屋形式は、入母屋若しくは寄棟が多い。集落の導入部に架かる伊豆急行線の鉄橋は落合の集落の象徴となっている。



落合の集落と鉄橋

③活動（鬼射（市指定無形民俗文化財））

ア 鬼射の歴史

鬼射は、落合の高根白山神社で行われる祭事である。通常、歩射・御歩射・御奉射と書いて「おびしゃ」と読むことが多いが、鬼射と書いて「おびしゃ」と読むのは珍しく、的の裏に「鬼」の字を書き、それを射るところからきていると考えられている。



鬼射（昭和29年（1954））

鬼射の起源や伝承の由来については定かではないが、土地の古老の話によると、落合の開祖は尾張出身、^{おさだしょうじただむね}長田庄司忠致の三男で、源頼朝に追われてこの地に逃れ、遂にはこの地に定着することを決め、落合村を開き、その際、高根

白山神社を奉請して氏子守護神とした。

永正16年（1519）本殿の造営、鳥居拝殿の新造営とともに10月24日の祭典が盛大に行われた。その翌年、永正17年（1520）2月1日の祭典で初めて鬼射を行い、その年の災厄を払い、五穀豊穡を祈願したものだといわれている。

イ 現在の祭事

鬼射の的は竹を使用して毎年手作りされている。まず、的の支柱となっている真竹から水分を出すために、3日ほど前に真竹を山から切って保管しておくことから始まる。その後、竹を割いて約1mの竹ひごを作り、その竹ひごを編んで的の骨組みを作る。竹を割くには熟練した技術が必要となる。鬼射の日が近づくと、的の表面に紙を貼り、裏側に鬼の字を書き完成となる。



鬼射の的の製作

現在の祭事は、弓太郎（祭事の見届け役）を中心に、役者（射手）2名、酌取（介添）2名の合計5名で行われる。奉納前日は、海辺へ行き、浜垢離（はまごり）で心身を清め奉納に備える。その際に、祭事のお清めで用いる海水と「もっこ」という海藻を採ってくる。

祭事当日は、午前10時より神社において神事が進められる。お参りした後、役者2名が、2本ずつ3回、的に向けて計12本の矢を射て、その矢が1本でも神社の境内15間（約27m）の矢場に設置してある四方1mの的を射通せば、その年の災厄（鬼）は退散し、五穀の豊穡は疑いないといわれている。12本には12か月の1年という意味がある。弓の儀式後は、三三九度の儀式を行い、的の裏にある鬼は、子供たちが石を投げつけて退治する。大人から子供まで、皆が参加しているお祭りである。



鬼射（弓を受け取る）



鬼射（弓を射る）



的の裏の鬼に石を投げつける

祭事終了後は、観覧者や氏子へお守りとして、和紙を円形に貼って中央に墨で丸を描いた直径15cm程の小的が配られ、それを家に飾る風習がある。20年程前までは約1年後の1月のどんと焼きのときに小的を焼いていたが、現在では各家庭で焼き、2月1日の祭事に再び小的をもらうのが習わしとなっている。



小的を家に持ち帰る



各家庭で焼く小的

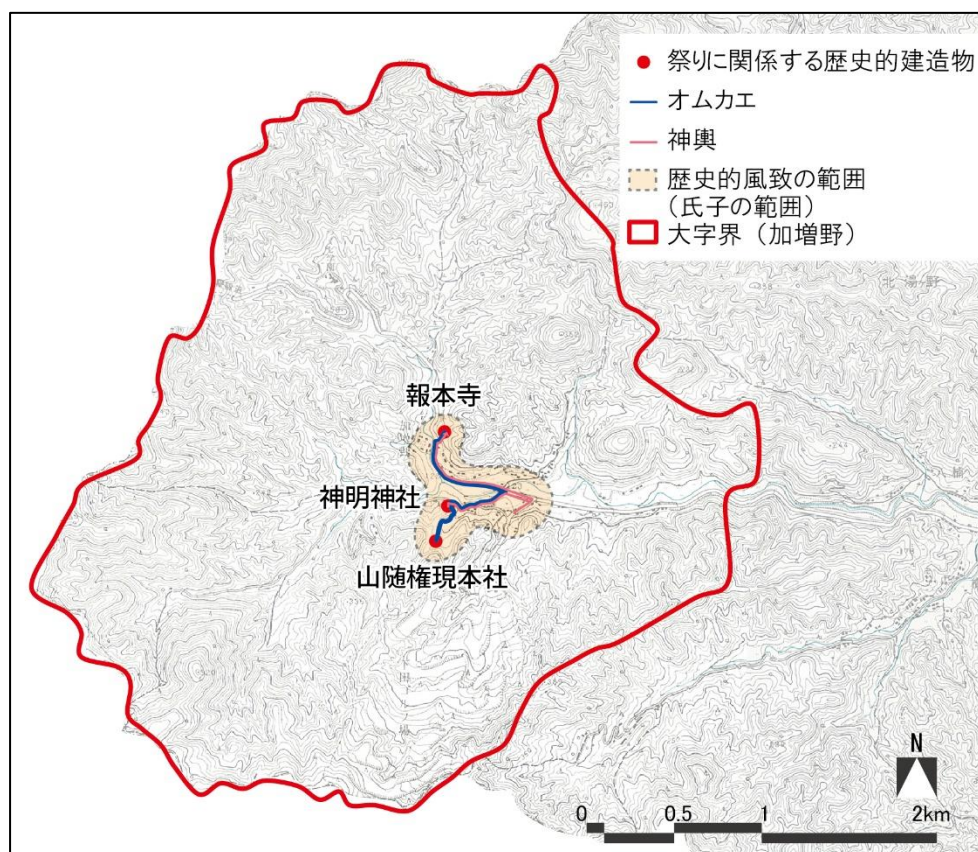
落合の鬼射は、長く伝承され、地元の人々にとって、生活の中に深く根ざしたものとなっている。

(4) まとめ

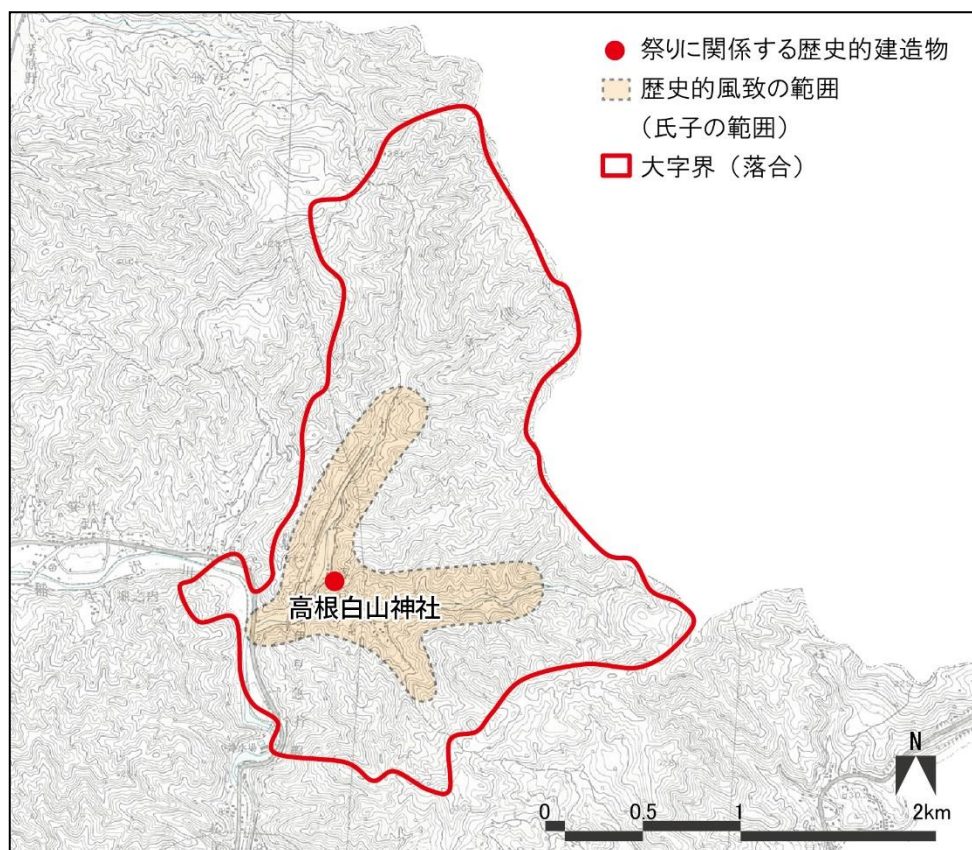
加増野の報本寺の山随院権現祭幡廻し、落合の高根白山神社の鬼射は、稲梓地域の里山で、地域の人が代々受け継ぎ、大切にしてきた祭事である。また、どちらも地域の資源である竹を用いる。山々に囲まれた集落のなかには田畑が広がり、春夏秋冬を境に色とりどりの異なった美しい景観を見ることが出来る。これらの祭事は、自然環境に恵まれ、安定した暮らしが維持されてきた地域だからこそ継続できてきた。下田市にとって自然環境とともに維持向上すべき歴史的風致である。



稲梓祭礼にみる歴史的風致の範囲



加増野の山随院権現祭幡廻しにみる歴史的風致の範囲



落合の鬼射にみる歴史的風致の範囲